
BLOOD & BLESS

【桃月】

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLOOD & BLESS

【ZINE】

Z0203E

【作者名】

【桃月】

【あらすじ】

やろうとしている事は果たすことが出来なかつた償いだ。だが、それをもし果たせたとしても、俺の心の罪は消えないだろう。……それでもいい。彼女の笑顔が再び、戻るなら……。俺は血に染まる殺人鬼となろう。右手には白銀に輝く聖なる天使の剣を。左手には漆黒に瞬く血に飢えた悪魔の剣を。今、この罪を償いに行こう。これが俺の選んだ選択肢だから。

(前書き)

少年漫画の読みきりとして読んでもらえたら嬉しいです。
軽く、読んでください♪！

やろうとしている事は果たすことが出来なかつた償いだ。
だが、それをもし果たせたとしても、俺の心の罪は消えないだろ？

……それでもいい。

彼女の笑顔が再び、戻るなら……。

俺は血に染まる殺人鬼となろう。

右手には白銀に輝く聖なる天使の剣を。

左手には漆黒に瞬く血に飢えた悪魔の剣を。

今、この罪を断罪しよう。

これが俺の選んだ選択肢。

『ツキナ、予定位置についたか?』

「後、一分かかる」

霞んだ空を羽ばたきながら、この夜空を見上げる。

一点の雲もなく、ただ、紅の月が輝いているように見えた。

だが、実際には月は紅色には輝いていない。

俺の瞳が真っ赤に染まっているから、そう見えるだけだ。

古くから赤き眼を持つ者達として、今では絶滅種と世間で言われている一族。

それは5年前のある事件を機に、何者かによつて、一族が壊滅状態に追い込まれたからだ。

大量の虐殺、血の飢えとその衝動、食物連鎖、そして……「死の世界」。

俺は一族の里を離れていたので、幸運にも生き残ることができた。

この事件で生き残つたのは俺、それと……もう一人。

幼馴染のユイ。

ユイ・グレイハート。

彼女は俺よりも3つ、年下だった。

グレイハートの家系はアベラ族の中でも、皇族に位置する位だった。

一族が壊滅した後、俺はユイを守るために……一族を再興させるために、俺は色々な事にこの身を染めていった。

ほとんどが裏での社会の仕事だった。

もちろん、ユイはこれに反対した。

『駄目だよ。危険だよ……こんな事、して欲しくないよ』

ユイの言つた言葉は確かに正論だつた。

だけど、まだ俺達は15歳にも満たない子供が仕事で大金を稼いでいくとなると、俺にはこの方法しかなかつたと思えた。

……いや、単に楽だつたからなのかもしれない。

これが、最善の道だと勝手に決め付けていた。

時には窃盗として、時には情報役として……。

報酬が上がるにつれて、危険な仕事へと変わっていく。

そんな毎日が続いていく中だった。

ある日、突然ユイの姿が消えてしまった。

部屋のテーブルには置手紙が置かれていた。

『勝手に出て行つていじめんなさい。でも、私はこれ以上、君の汚れていく姿を見たくない。……勝手だよね？ わかつているよ。……でもね、私には耐えられなかつたんだ。君が汚い社会に慣れていくのが、私には耐えられなかつた……。『じめんな。我がままだよね……。君がこれを見る』ころ、多分、私はもうここにはいません。探しで……、とは言ひません。でも、君は見つけられないと思つ。ひつて、今の君には、本当の私が見えないと思うから……。それで、お体に気をつけてください。』

最後の部分は泣いて書いてしまつたのか、涙の後でグシャグシャになつていた。

俺はただ、ひたすらその手紙を何度も読んだ。虚しさだけが、何度も俺の心を埋め尽くした。

彼女のために俺は今まで、頑張ってきたの……じつして……？

答えは手紙に書いていた。

“汚れていく君が見たくなかつた”。

「汚れていくつて……だつて、なら、一體どうじろつて……つー」

それも答えは出でいた。

原因は俺の甘さ故。

簡単に世界を決め付けて、それを無理に押し通して、そして、それが正しいと思い込んだ俺のせいだ。

「う……うわあああああつーーー」

泣き叫ぶように喚く俺。

追いかけても、見つけられない。

きっと、彼女は遠い世界に行つてしまつたのだ。

汚れた俺は、きっと探すことができない。

見つける事ができない……。

俺には……コイといる資格がない。

俺の心は闇に墮ちていく。

それが間違ないと分かつていても、俺には止められなかつた。

絶望、虚無、喪失感。

その全てが俺の心を満たしていた。

「……一族の再興なんて、もういい。コイにも会えないのなら、もう、いい。このまま、墮ちるだけ墮ちていこう、深い闇に……」

……今思い返せば、残された俺の選択肢はまだ、他にもあったのかかもしれない。

だが、俺にはもう希望がなかつた。

ユイがいなくなつた今の俺には、たつた一つの選択肢しか、見つけることができなかつた。

闇に染まり、闇のままに生き抜くこと。

そして、5年の間が過ぎていいく。

5年間。俺はただ、ひたすら、闇に墮ち続けた。

世界は俺に嫌つて言うほどの人の汚さを教えてくれた。

暴力、金、女、酒、裏切りと背徳の連続が俺を闇に包み込んだ。

誰も救つてくれない。

誰も俺を好きになつてくれない。

誰も俺を愛してくれない……。

俺は墮落してしまつたんだ。

心の闇に……。

「ヒビキ、予定ポイントに着いた」

ヒビキに通信を送る。

ヒビキ・ランゲージ。

3年前、俺がフリーで殺し屋をしていた時に組んだ、パーソナル・ソポーター。

パーソナル・ソポーターとは、この時代の裏社会の者達には無くてはならないオブザーバーみたいなものだ。

いくら凄腕の殺し屋、もしくは諜報者としても、正確な地図がなければ、成功率が下がってしまう。

それを埋めるために、パーソナル・ソポーターがいる。

ヒビキは、パーソナル・ソポーターの中でも凄腕に入る方で、有名になっている。

『わかった。では、セキュリティを落とすぞ！』

ヒビキからの返事が聞き、俺はその場に待機する。

ヴェイ・ハーベッジ社のビルの正門の陰で待機する事5分。ヒビキからの通信が入ってくる。

『ドアのセキュリティは全て解除した』

「……早いな」

『ははっ！ 後、セキュリティも狂わせておいた。奴 やつこ さん、今では大騒ぎして、飛び出す頃だぜ。入るなら、今がチャンスつてことだ』

「何から、何まで助かるよ。……ヒビキ。」

『馬鹿、よせや。……それにしても、初めて名前で呼んでくれたな。ツキナ』

「……」

初めて……か。

確かに、口にして出したのは初めてなのかもしれない。

俺はヒビキの事を今まで「お前」と呼んでいた。

何も興味の持てなかつた俺は、相手の名前でさえ、口クに呼んでいなかつた。

だが、今になつて何故、ヒビキの名前を口に出したのか……。

それは多分、今回の仕事で“彼と別れるかもしない”からなのかもしねい。

『なあ、ツキナ』

「何だ……？」

ビル内へ潜入する前に、最後にヒビキからの通信が入ってくる。ヒビキの声色は少し険しく、真剣な声だった。

『今回の依頼、……確か、奪還だったな？　お前の仕組んだ依頼なんだろ？　調べてみたが、俺達には利益が何一つなかつた。お前、何をするつもりなんだ？』

「…………」

『何も言えない……か。お前とは結構長い付き合いだったんだけどな。それでも、やっぱり壁はあるんだな』

「…………すまない」

『いや、そんなに気にしていいないか。人には事情つてもんがある。……俺にだって、お前に言いたくない事が一つや二つくらいあるさ。だけどな、……今のお前は死に急いでいるように俺からは見えたからな』

「…………」

『これまで、お前はそりや、もう凄いくらいに活躍してきた。“紅の墮天使　クリムゾン”と周りから謳われるくらいにだ。だけど、今のお前には何と言えばいいのか、そう……命の灯火が感じられない。お前……このミッションで死ぬ気なんだつ？』

ヒビキの言葉が胸に突き刺さつたよつて入り込む。確かに、死ぬ気だった。

自分の命を懸けていた。

だから、言葉が出なかつた。

何も、言い返す事ができなかつた。

『……ツキナ』

ヒビキが声色を和らげる。

『……必ず、生きて帰つて……』

その言葉を聞いて、胸がこみ上げる様に熱くなつた。

「ああ……、ありがと」

『ははつ、礼なら帰つてから、俺に直接言つてくれ。……それじゃあ、成功祈つているぜ』

プリンと、通信が切れる。

俺はもう切れてしまつた通信機に話しかけた。

「今まで、ありがとう……ヒビキ」

通信機を閉まつて、背中にぶら下げていた大剣を手に取る。

双極剣 ブラッド・アーク 。

収納剣とも呼ばれるこの剣は、一本の剣から成り立つていて。

漆黒に瞬く剣 ブラッド と白銀に輝く剣 アーク 。

この一つの剣は幾度とも無く、俺に力を与えてくれた。この7年間、一緒に俺と戦い抜いてきた相棒達。

……これでお前達とも最後かもしけないな

絶対に返事がないと分かっていても、俺は心の奥底で語りかけた。

幾千もの殺し合いを超えて。

幾千もの修羅場を潜り抜けてきた。

この手は既に血で染まっている。

だが、それでもあの日の後悔は今もこの胸に残っている。

……これは、償いなのかも知れない。

罪と罰を逆手に、俺はユイを裏切ってしまった。

その罪への償い。

そして、その対価となる罰。

だが、それでも……あの時、救う事ができなかつた彼女を今、救いたい。

それが、彼女が望んだ事じやなかつたとしても。元より、俺には彼女を幸せにする事ができない。

その権利は、当の昔に自分で放棄してしまつたのだ。

だから、彼女を幸せにするのは俺ではなく、未来でそのすぐ隣にい

る人。

俺はその人にバトンを渡しに行けばいい。

彼女が幸せになる事。

それが、あの時……5年前に出せなかつた俺の今の答えなのだから。

「……ラストミッション。これより、ユイ・グレイハートを奪還する！」

「ビル内部に侵入者を確認！……これは……“紅の墮天使”です！」

管理室では、ツキナが進入した事を知り、慌しくなつていた。

「……その映像をこちちらにまわせ

命令した男の言つとおりの部下らしき者達、数名が急いで映像をまわす。

立体映像が出てきて、ツキナの姿がはっきりと映りだした。

「やはり、彼か。クックック……つぐづぐ、」の子が愛しいと見える

男の脇には眠るように安らかに目を閉じている少女の姿があった。男はその少女の頭を優しく撫でていた。

「……トキノ、いるか？」

唐突に男が部下の名前を呼び出す。

「……はい、ここに」

トキノと呼ばれた少年が、さつきまでいなかつたはずの場所に闇の中から、その姿を現す。

小柄な体格だが、十分な殺氣を秘めた目を宿して、モニターに映つたツキナをじつくりと見ていた。

「これで3度目になるな。どうだ？ 彼との殺し合いは……」

「ええ……、樂しいばかりです。……でも、そろそろ決着を着けたいですね」

「クックック、そうか。」

男は甲高い笑いをした後、静かにいつ言った。

「なら、このステージが最後としようか。トキノ」

「……では、お好きにさせてもらつても？」

トキノが確認をとる。

その顔には不気味なくらいの笑みが浮かんでいた。

「ああ、君に任せるとよ」

「……あらがとうござります」

トキノは礼をして、後ろへと下がる。
そして、獲物を仕留める事を主人から許されて、すぐに獲物の場所へと向かう。

今夜は血の宴だ。

どちらが生きるか、どちらが死ぬか……。

それは誰にもわからない。

「クックク、これは愉快な事になつてきたな。……そうだろ？」

「ゴイ

少女の頭を愛でる様に撫でながら、男はツキナを見て、嘲笑つかのよに楽しんでいた。

その笑みには絶対の自信があった。

自分は絶対に負けないと自信が……。

「まあ、いざれ、君にも見てもうつよ……」

男は眠つてゐる少女にさう叫びた後、ミラー越しに映る円を眺めた。

「わい、『本当の円の色は、何色なのだらうね？』」

長い、長い階段を駆け上がりしていく。

螺旋のよつこなつてゐる階段はこの場合、終焉へとケリを着けに行く勇者 ヒーロー を連想するだらう。

残念ながら、俺はその反対の立場なのだが。

ヒビキのサポートで、一般兵は外のアラームに誘き寄せられている。そのお陰で樂々とビル内部に入ることができ、なおかつ、遭遇せずにスムーズに進むことができた。

だが、この螺旋階段を上つてからは先がまったく見えてこない。こつして見ると、まるで迷宮に抜け出せなくなつた囚人みたいた。

「……本当にその通りかもしだれないな」

小言を漏らしながら、上に上がり続ける。

そして、ようやく出口が見えて、俺はそのドアを開けた。

そこは、ビルの上階にある大広間だった。

ヒビキの情報では、この一階上にコイがいる。

「お久しぶりですね。“紅の堕天使”……いや、“アベラ族の生き残りさん”と言つた方がいいですかね」

正面から、何者かが俺に近づいてくる。
明かりが点いていないせいで、暗くて誰なのが分からない。
だが、この声には聞き覚えがあった。

「……トキノか」

「さすがに、名前くらいは覚えてくれましたか」

少年は、ニッコリと笑みを浮かべた。

トキノ・レグネイト

裏社会で、知らない者はいないと言われている天才的な殺人者。
若干14歳でこの社会に入り、数々のブラックリストを殺してきた。

……凄腕の殺し屋だ。

トキノが指で、パチンッと、音を鳴らす。

その音が合図に、一斉に大広間に明かりが点き始める。

「どうして、お前がここにいる？　お前とユイはどう関係しているんだ？」

「……僕の『ご主人が』ここにいるからですよ。僕はユイさんを“敵”から守るように、『ご主人に言い付けられているので」

「……そうか」

「ええ、そうですよ」

殺氣を全て、トキノへとぶつける。
そして、剣を構えた。

「なら、言葉は必要ないな……」

俺はすかさず剣を翳して、トキノへと接近する。

「おつと……」

振り下ろした斬撃をいとも簡単にかわし、トキノは後退する。

「そうですね。もう、言葉はいらない。これで3度目ですから……、
僕もあなたが殺したくて仕方なかつたんですよ……あつは、アハハ
ハハツアハハハハハハツ！！」

狂つたように笑いながら、ホルスターから、一挺の拳銃を引き抜く。

その刹那、剣と銃が交錯した。

銃弾の雨が俺へと降り注がれる。

重い鉛の音が叩き落しながら、俺は一步、また一步とトキノへと前進する。

「やつぱり、あなたはおもしろいやア～～！　さすがだよ、紅の堕天使い～ツ～～！」

無駄のないトキノの正確な射撃が俺の体を掠めていく。

「チツ……！」

流石にトキノ相手に全ての弾を斬る事は難しい。

「ほらほ～り！　どうしたんですかあ～？　このままじゃ、死んじや～ますよお～？」

笑いながらも、トキノの弾丸は止む事を知らず、俺に襲い掛かってくる。

俺は周りを大きく走るように、その弾丸を回避していく。

そして、トキノの懷へと飛び込み、斬りかかる。

だが、斬りかかった剣を銃で防御されてしまつ。

踏み込みが浅かつたか…！

「あはっ……ハハハツ、アハハハハツ！」

トキノが再び、氣味の悪い笑みを浮かべて、笑い出す。
……その姿は、どこか誰かに似てているような気がした。

「やつぱり、やつぱりだ！ この世界はこれだから、楽しい！ こんな、強い奴がたくさんいるから、面白い！ 楽しい！ こんな奴がいるから……！」

トキノの力が増し始める。

「僕は死ねないんだよおおおオオオオーッ……！」

その叫び声と共に ブラツド が弾かれる。

壁の窓ガラスに当たり、割れてしまい、 ブラツド はそのままビルから落ちていく。

「しまつ……！」

片方の剣を失い、今度はトキノが懐に飛び込んで、至近距離で銃口を俺の額へと定める。

「死ねええええええええーッ……！」

トキノの銃口が目前に迫る。

やられる……！

凄まじい寒気が全身を襲つた。

その途端に視界がシャットアウトする。

そして、彼女の……コイの姿が俺の脳裏に浮かび上がった。

気づけば、周りは一面中花畠で包まれてゐる。
わざまで、トキノと戦つていたのに……。

「トキノに殺されたのか……俺は

あの世に来てしまつたのだらうか?

だが、それにしては、見覚えがある景色に違和感を感じる。

「ここは……

やつ。ここは、俺の思い出の奥深くに閉まつておいた場所。

アベラの里にある花畠の丘だ。

丘の真ん中には幼き彼女の姿があった。

5年前と姿、形は変わっていない。

俺の知っているユイだった。

『頑張らなくてもいいんだよ?』

脳裏に浮かんだユイはそう言って、微笑んでいた。

俺の罪を赦そうとしていた。

ユイの両手が俺の顔を包み込む。

「…………」

『もう、頑張らなくてもいいんだよ?』

「…………う

『ね? だから、もう頑張らなくていいんだよ

『…………ちが……う

『まひ、私はここにいるよ。それにアベラの姫だったて、私達を待つ

てこる』

「…………違つ…………違つ…………」

『シキナ、一緒に帰るわよ。みんなと一緒に一緒に

「違つ…………違つ…………」

ゴイの手を突き放した。

「まだ、終わっていない!! 僕にはまだ、やらなきゃいけない事が残っている!! 5年間の償いだ!! だから、それをまだ止める訳にはいかない!! 果たさなきゃいけない!!」

『…………そつか』

俺の反論にゴイは下がる。
その声はどこか寂しげに聞こえた。

『ツキナには……帰る場所がもつあるんだよ。』

「……」

俺の帰る場所。

それは本当にあるのだろうか。

疑問が頭に過ぎないところ。

『なに、どうして私を助けようとするの？』

「それは……」

『……罪？ それとも、罰？』

『ツー、そうだ。君を救えなかつた、俺の……断罪だ！』

『でも、それって……君の本当の意思なの？』

「俺の……意思？」

『……本当は苦しかったんだよね？ 今まで、私のためにその手を血に染めて』

「違う！ 僕……はッ……」

『……なら、その震えている手は何……？』

指摘されて、自分の手を見てみた。本当に手がブルブルと震えていた。自分の手を見て、コイに顔を向ける。彼女は悲しそうに、『「めんね……。今まで、辛い思いをさせてきて……』と、俺の手をそっと撫でた。

『……生きよつよ』

「え……？」

『君の罰は生きる事だよ。……死ぬなんて事は絶対に私が赦さない』

「でも、俺は……ッ！」

『もう、君は十分苦しかった。……だから、もうこれ以上、苦しまな

『……も、これ以上、人を殺さなくともいいの。生かしていいのよ。』

「赦してくれるのか？　俺を……」

俺の言葉に苛笑しながら、ユイはこう答えた。

『赦すも何も……。君には最初から、罪なんてないよ』

その言葉で、悪夢からやつと覚める事ができたよう、目を瞬きさせる。

……罪なんて初めからなかつた。

もし、そつなう、俺はなんて遠回りな道を歩いてきたんだろ？……。

俺……は……

ユイは俺の手を離して、俺から一步、遠ざかつた。

『ツキナ……』

「……何だ？」

満面の笑顔でユイは僕を見つめていた。
曇りのない明るい笑顔で……。

『……いつでらっしゃい』

僕は最後の最後まで、彼女に助けられていた。
そして、『生きる』という後押しを一步、俺の背中を押してくれた。
それがどれほど、大切なのか……。
今、この時になつて実感した。

「……ああ。行つてくれるか』

後ろを振り返らずに、俺は光が渦巻いている場所へと歩いて向かった。

多分、後ろでは、精一杯に手を振りながら、応援してくれるユイの姿があるだろう。
光へとたどり着き、俺は再びリアルへと帰つていく。
本当に待つている彼女の場所へと……。

視界が戻る。

目の前では既に銃口を俺に向けて、勝ち誇るよつこ笑つてこたトキノ姿があつた。

このままでは確実に俺は死ぬだろ。でも、俺は諦めなかつた。

コイと、コイと約束したんだ……！ 生きる事を！

残された アーク を力一杯振り絞つて、振りかざす。

「つまおおおおおおおおおおーッ！—

どちらが相手を早く仕留めるか、もう分かりきつていた。

だが、それでも、……！

万に一つの可能性があるなら、俺は賭けてみたい！

それがコイとの約束の証なのだから。

お互ひの鼓動が重なり合つ。

そして、緊迫する空氣を乱すかのよつと、その音が鳴り響いた。

力チャツ！

先に、トキノが引き金を引いた。
だが、それは発砲音ではなく、マガジンの弾が空になつていい音だ
った。

「な、なんで……！？」

「つま らむら らむら らむら らむら らーッ！」

振り下ろした剣がトキノの目前に迫る。

「そ、そんな……！ う、嘘だ……！？ 嘘だ、嘘だ、嘘だ、ああ
あああああーッ！—

もひ、これ以上、人を殺さなくてもいいの

「…ッ！—」

ゴイの言葉が頭の中で蘇る。

その言葉が反動に、ピタッと首筋で剣を止めた。

「はあ……はあ……」

トキノが息を乱しながら、その手に恐怖を宿して、一いつひりを見つめていた。

「はあ……はあ……どうして殺さない?..?」

「…………」

「答えるよッ!… どうして、僕を殺さないんだよッ!…」

「…………もつ、殺さない」

「まつ? 何言つて?」

「…………」

それ以上の言葉はもう掛けなかつた。

俺はトキノに背を向けて、この上の階に通じる階段へと歩いていく。

「クッ……おー! ふざけるなよ! 僕は……僕はなあああー! !

!」

トキノの叫びに振り返る。
ポケットから、小型のナイフを取り出して、じつに突進してくる。

「お前みたいな奴が、お前みたいな偽善が!… 一番大嫌いなんだ
あああー! !

その突進する姿がまた、誰かと被つた。

……ああ。

やつぱり、そうだったんだ。

トキノは、昔の……俺と似ていたんだ。

偽善を嫌う所が、強さだけをひたすら求める所が……。

昔の俺にそっくりだった。

グチャツ！

ナイフが腹に突き刺さる。

冷たい感触が体中を伝わっていく。

「……な!?」

トキノの顔は驚いていた。

簡単にも避けることができた攻撃を何故、かわさなかつたのか……。
多分、トキノの頭の中はその事で軽く混乱状態に陥っているだろう。
トキノはナイフを抜き取つて、それを地面へと音を立てて落とした。

「ぐつ……ー」

「どうして……だ?」

「……何がだ?」

「どうして……、あんな攻撃、かわす事なんで余裕でできたんだろ？ なに、どうして……？」

「へへ……別にどうだつていいだろ？」

思った以上にナイフが腹の奥に刺さつたせいか、手で押さえるだけじゃあ、少々無理があつた。

……思わぬ痛手だ。

俺は服の袖を千切つて、それを包帯代わりに巻きつけた。それを終えると、今度こそ、上の階に向かうために、トキノに背を向けた。

「…………」

トキノは黙つて、それを許した。

そして、悔しがるように……地面にうつ伏せて泣いていた。泣き声が俺に伝わってきたが、俺は振り返らない。

そう。今は、立ち止まれない。

この上にいる、コイを助けるまでは……。

「使えないな……。トキノの奴は……」

赤いワインを口に注ぎながら、男は立体映像に映っているトキノの座り込む姿を見て、がっかりしていた。

戦う気力を失ったのか、さつきから、ピクリとも動かない。

「まあ、……いい、初めから、大して、期待なんてしていなかつたからな」

それにしても……、と男は思う。

彼は何故、トキノを殺さなかつたのだ？

男は不思議に思いながら、ユイの顔を見た。
未だに安らかに眠っている彼女は、どこか、少し満足げな顔をしていた。

……“人の心を救う力”。

その力を皇族であるグレイハートは代々、受け継がれている。
そして、彼女もまた、その一人。

「……やっぱり、君か。どうして、君は彼ばかり……」

男は少し悲しげな顔を見せると、椅子に掛けてあつた剣を手にした。剣を手にした途端、男の表情が一変する。

男の愛が憎しみへと変わる。全ては少女の全てを我が物にするために。

「いいだろー！　コイを奪い返したければ、こじこまでこじ。直々にこの私が相手をしてやるう、アベラ族最高傑作のこの私がな……」

「！？」

階段を上がり終えて、ようやく最後の目的地へとたどり着く。

赤い絨毯　じゅうたん　が敷き詰められて、部屋全体のほとんどの色が赤で染まっていた。

天井には天使達の絵が飾れていで、まるで死んでいった者達への鎮魂歌を奏でているように見えた。

部屋の中央のベッドには一人の少女が寝かされていた。

綺麗な赤のドレスを着て、神々しいまでに美しい。

だが、やはりあの頃の面影も残つており、少女らしい可愛らしさも含まれていた。

「…………」

「 よつやく、来たよつだね……」

俺がユイに近づいたとした瞬間だつた。

部屋の奥、椅子に座つてゐる男が俺に話しかけてきた。反対方向を見ているので、相手の顔が認識できない。

「貴様か？ ユイを連れ去つたのは」

「…………」名答。 さう、この私だ

「どうして連れ去つた？ 何が目的だ？」

「目的か……。目的は同じだよ、ツキナ」

男は椅子から立ち上がり、俺の方へと近づいた。そして、その顔をこちらへと向けた。

その眼には赤に染まつた、狂氣の色が垣間見える。
赤の眼を持つものは世界でアベラ族だけ。

「……そんな……一族は俺とユイを残して……全員死んだはずじゃ……」

「クッククック。アベラ族は仮にも、中々の戦闘種族。中でもアベラの強者は、裏世界の強者と同等に戦える。なのに、何故壊滅した?……君はこう、疑問に思ったことはないのかな? アベラ族に“裏切り者”がいたと……」

「……貴様が、殺つたというのか?」

怒りが沸々と湧き上がつてくる。

「ああ、そうだ!! この私が!! シュナード・グレスロットが!! アベラを壊滅状態に追いやつた!!」

……グレスロット。

その名はアベラでは、グレイハートの次に称えられる貴族だ。

「どうして……、何故、アベラの貴様が……ツ!?」

「簡単な答えた！アベラ族は衰退し、皇族が持つ最大の権限をグレイハートは放棄した。貴族達は墮落させ、民衆は格の差を思い知らずに馴れ馴れしく、……貴様達は何も分かっていない。世界は上級貴族によつて、支配されるのだと……。その皇族の血を引いたユイは、私の妃となつてもらひ！」

「……狂つた貴族主義者が！ そんなエゴを押し通しても、世界は何も変わりはしない……つ！」

「クツクツク……、何とでも言えぱいい！ 既にヴェイ・ハーベッジ社は世界の3分の1を占めている。時期にこの計画が私の部下全域に伝わるだらう。君がどう足搔いた所で、もはや、……手遅れだ！」

男が剣を構える。

その目には禍々しいまでの殺氣がこめられていた。

俺もすかさず、剣を構えた。

腹に刺さつたナイフの傷は大きい。

既にトキノとの戦闘で体力も底をつき掛けている。
それでも……。

「……俺はユイを取り戻す。これは罪や罰なんかじゃない！ 俺の
意思だ……つ！」

最後の死の晩餐がもうじき、始まるつとする。

奏でられるのは戦いの円舞曲 ワルツ。

懸けるのは互いの魂、そして、命。

血と汗が流れしていく中で、天井に描かれた天使達は微笑みながら、この戦いの行く末を見定めていた。

「ウエハセハセハセハセハセ—。—。」

唸り声を上げ、剣を相手に翳す。

そして、……たつた一人の少女を懸けて、俺は全ての歪みへと立ち向かつた。

復讐者 アベンジャーとしてではなく。

愛する者を取り戻す騎士
ナイトのようこ。

いつの日か、二人で遊んだ花畠。

また、帰ろう。

一人で、一人なら、また……。

あの日を取り戻せるよ。

ある晴れた日、幸せそうな3人の家族が公園で遊びに出かけていた。真ん中には、7歳くらいの無邪気な少女が、父と母の手を握って、歩いている。

「ねえ、パパ！　ママ！」

いきなり、強引にお父さんの手を引っ張り始めた少女は、せがみながら、顔を見つめた。

「どうしたんだい？」

そんな少女に、お父さんは優しく笑いながら、尋ねる。
隣で、少女のお母さんがそれを眺めながら、微笑みます。

「ブランコしたい！　ブランコー！」

「そうか。よし、それじゃあ、ブランコで遊ぼうかー！」

「うん！　うん！」

少女は曇りのない嬉しそうに笑顔を浮かべた後、父に向かって、こう言つた。

「ありがとう！ パパ、大好きだよ！」

その言葉を聞いた少女の父は、戸惑いながらも、満足げな笑みを見せて、愛しい娘を見つめる。

少女は純粋な目で父を見つめ返していた。

宝石みたいに輝いた、赤色の瞳を浮かべながら。

（後書き）

あとがき

初めてまして、筆者の桃月です。

今回は過去に書いた物を多少、改良して内容をリメイクした短編小説を公開しました。

最後まで読んでくれた読者様方、ありがとうございます。
この小説……僕が中学2年生（？）の時に書いたものなので、かなりあやふやな所があつたと思います。

……本当に申し訳ないです（笑）

簡単な設定を言いますと……。

- ・5年前に主人公とヒロインの除いた一族の皆が壊滅させられる。
・一族の再建を誓う主人公。だが、闇の社会に生きていく、ヒロインに逃げられる。（主人公、自暴自棄に入ります）
- ・3年前にヒビキと手を組み、裏社会で名を馳せる。ちなみに、この時から、“紅の堕天使”と呼ばれる。（既にトキノ、一戦目の殺し合いを終えている）
- ・ヒビキとコンビを組んだ数カ月後にコイの消息を掴む。
- ・一度はコイを取り戻したところまでいったが、トキノに邪魔をされる（二戦目）
- ・そして現在……、コイの消息を再度掴む。

で、本編……という訳です。

中々、複雑な物語ですみません（汗）

今、思うと、本当に駄作だな……これ……W（-A、）

後、10年後の内容に関しては読者様、皆さんの「」想像にお任せします。

父親が誰なのかで、この物語は大きく変わるとと思うので……。

ט' טענין!

言い忘れていました！

僕 女になりました。他の小説もお願いします！

最後に、本当にこの小説を読んでいただいた方に感謝を申します。

おつがど「ハ」だこもか！

これからも、頑張つて執筆しますので（疲れていいく毎日～w）、（どうかよろしくお願ひしますね（^▽^）

それでは……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0203e/>

BLOOD & BLESS

2010年10月16日08時07分発行